元ラグビー日本代表・平尾剛さんに聞く

平尾剛（ひらお・つよし）元ラグビー日本代表・成城大学教授
1975年大阪府出身。成城大学経済学部教授。専門分野：スポーツ教育学，身体論，スポーツ運動学。
同志社大学、三菱自動車工業京都、神戸製鋼コベルコスティーラーズに所属し、1999年第４回ラグビーW杯日本代表に選出。2007年に現役を引退。度重なる怪我がきっかけとなって研究を始める。専門はスポーツ教育学、身体論。著書に『近くて遠いこの身体』『脱・筋トレ思考』（ミシマ社）、内田樹氏との共著に『合気道とラグビーを貫くもの――次世代の身体論』（朝日新書）、『ぼくらの身体修行論』（朝日文庫）、監修に『たのしいうんどう』（朝日新聞出版）がある。

た。あれで、日本の高校野球にうんざりさせられました。

（平尾）まず松井選手への敬遠の件に関しては、ようやくあれが社会的にも異常なことだと認識されたんだなと。つまり勝利至上主義ですよ。勝つためには、要は相手がもうかなりの確率で打つバッターであれば、打たせずに歩かせると。結果的に勝ったわけですけれども。でも、世間からはブーイングがあって、多分観客からもかなりのものがグランドに投げ込まれた。一時は試合を中断するぐらいだった。

（斎賀）批判の目を向けられた。

（平尾）勝利至上主義の一つの弊害だと思います。甲子園全体のことを言えば、やっぱり異様です。あの暑い、もう本当に異様な夏の暑さの中で試合をする。観ている人たちはクーラーの効いた部屋でテレビをつけながら観ている。テレビの画面には熱中症アラートが出ている。まあ、そこの異様さに早く気づかないといけないと思うし、やっぱり高野連にしても、主催している朝日新聞にしても、まあ対処はしているとは思います。スパイクを白にしたりとか試合時間ずらして、朝と夕方にするとか。それでもやっぱり限界だと思うんですね。地方大会に目を向ければ、暑い時期にやっている地方大会の開会式で倒れる人が出てくるのは、何年も前から指摘されている。メディアには載ってこないんですけど。あの環境が、いわゆる10代のまだまだ心身成長途上にある子どもたちがスポーツをする環境ではないというね。そこにメスが入れられないっていうところに、日本の野球界、もっと言うとスポーツ界の超保守的な思想が見られるなというふうには思いますね。もし甲子園の今のやり方を止めることができたら、日本スポーツ界は変わると思います。

選手の将来性

（斎賀）夏の甲子園での全国野球大会のあり方を変えるべきです。

（平尾）全国大会でもそうです。1位決める必要ありますかって。トーナメントって一番強いチームが一番長く、たくさん試合をするんですよ。一方で多くの選手やチームが1試合で終わってしまう。超非効率ですよね。

（斎賀）本当に実力決めようと思うと、長くたくさん試合しなきゃ分からないですよね。でもトーナメント制だとたった一試合も落とせないわけですよね。そういう意味でもトーナメント制は勝利至上主義が前面に出ていますね。もう地区予選から1回でも負けたら終わりというね。

（平尾）っていうことは、当然チーム事情としては一番上手い人を。

（斎賀）出さなきゃいけないですよね。ローテーション組んで相手のレベルに合わせて、今日は3番手のピッチャーで行こうかとかいうことが、リーグ戦なら可能ですよね。

（平尾）ええ。結局、連投させてしまって、選手の肩を壊すっていうケースが出てくる。そういう意味では、今はドジャースの佐々木朗希選手がいた大船渡高校の指導者は、岩手県大会の決勝で佐々木選手に投げさせなかったんですよね。なぜなら準決勝までの試合でたくさん投げていたから。準決勝で投げさせたら、もしかしたら勝てたかもしれないけど。僕はものすごい慧眼だと思いますね。今、佐々木選手がメジャーに行って活躍しているということを考えたときに、長い目で見る。ああいう方が教育者だと思います。選手の将来を考えてせめて高校、大学までも僕は含めていいと思うんですけど、本人の将来性であるとか、もっと言うと社会性を獲得したりとか、そういう人間的な部分をちゃんと見越した上での指導ができるかどうか。そういう指導者がね、やっぱり一人でも多く増えなきゃいけないし、増やさなきゃいけないと思いますね。

試合後はノーサイド

（斎賀）平尾さんは日本代表だったときの心持ちはどうでしたか。マスコミは国の威信というかナショナリズムを煽りますよね。日本を背負っていらっしゃったんですか。

（平尾）国を背負ってるつもりは全くないですね。僕は代表に選ばれた時に、それまで代表になりたいとかそんな高い目標のない、のんびりした選手やったと思います。けど、社会人一年目で本格的に日本代表候補として呼ばれて合宿に行って、なんじゃこりゃって思ったんですよ。一緒に練習する選手たちのレベルが高い。当時バックスラインで元木由記雄（もとき ゆきお）さんとかアンドリュー・マコーミックとか増保輝則（ますほ てるのり）さんとか。スタンドオフに広瀬佳司（ひろせ けいじ）さん、それからハーフが苑田右二（そのだ ゆうじ）さんとかかな。フルバックが松田努（まつだつとむ）さん。そのラインで、僕がウイングで入った時に置いていかれたんですよ。要するにフォワードから球が出て、みんなが走り込む時に一瞬遅れたら、みんなダーって走っていって遅れたんです。僕は足の速さに自信があったので、えっ、そうか、出足のタイミング間違ったら置いてかれんねんや。なんじゃこのレベルって思って。でも、もしそれに合わせて動けるようになったら、どんな世界が待ってるのかなって思った時に、その速さに遅れない自分になりたいって思って。そこから、まあ、体が細かったからウエイトトレーニングをして、大きくなって代表には選ばれるわけですけど。

（斎賀）周囲のレベルの高さがモチベーションになったんですね。

（平尾）とにかく楽しかったんです。今までやってきたラグビーとは全然別物のラグビー。だからその世界で長くやりたいなって思っていたので、自分は日本代表を背負っているって意識はなかった。ただ周りの目は意識しました。周りはそう見るので。グランドの外でもジャパンの平尾ってなりますよね。唾を吐くとか服装もだらしない格好で歩くとかはしてはいけないと思いましたけど。

（斎賀）ラグビーの独特な文化という面もありますか。

（平尾）いろんな国と試合しましたけど、当然ノーサイド精神があるから、試合が終わったら笑顔です。ジャージ交換をするために試合終わってから、グランドで自分の対面にいたフルバックの選手のロッカールームを訪ねたんですよ。ほんなら、向こうの選手はビール飲んでいるんですよね。「おー！入れ入れ！飲め飲め！」って。今の今まで敵対してたのに。ラグビーが特別なのかもしれないけれども、あまり国同士の勝敗とかっていう意識はないですね。ナショナリズムというよりも、こいつらに勝ちたいみたいなこと。日本のためにみたいなことは、もうこれっぽっちも思ったことないですね。ただ子どもたちは選手を見ている。恥ずかしいプレーはできないっていうのはありましたね。そういう感覚です。

やっぱり「戦争はいけない」と言っていく

（斎賀）医療の世界では、人の命を守るのが使命なので、戦争とは相いれないわけなんですが、今の状況をどうみられていますか。

（平尾）いや、本当にきな臭い。日本だけじゃなくて、世界でもね、ウクライナもガザも大変なことになっているんですけど、やっぱり戦争はいけないと伝えていくべきです。今どんどんどんどん戦争の気配というか、足音が大きくなってきているような気がしています。

（斎賀）80年前と違うのは、平和憲法があることと80年前の教訓があるということですね。

（平尾）先の戦争の教訓をちゃんと引き出せているのかと僕たちが問われているんじゃないかっていうのはありますね。匿名のアカウントを使ったとてもひどいなと思うSNSの発信もある。若者がそれに影響を受けてしまってるんであれば放置はできない。地道に戦争反対、平和を求める発信への賛意、賛同をして大きなうねりを作っていかなきゃいけないかなと思います。

（斎賀）ありがとうございました。

おおさか医科・歯科九条の会

映画「武器なき斗い」上映会

1929年、政府の治安維持法改悪にただ一人反対し、右翼の凶刃に倒れた労農党代議士、ヤマセンこと山本宣治の生涯を描く。監督は『白い巨塔』『華麗なる一族』の山本薩夫。

日時　2026年２月21日（土）
　①午前10時30分～
　②午後２時～
　（各回140分）
会場　M＆Dホール
会費　無料
定員　各回80人
監督：山本薩夫
原作：西口克己「山宣」
出演：下元勉　渡辺美佐子　東野栄治郎　小沢昭一　谷育子